

Q 5 保健室等登校を始めた児童生徒がいますが、なかなか継続して登校できません。どのような働き掛けをしたらいいでしょうか。

現 状

- 1 保健室等登校のきっかけが親の強い希望で、本人にはまだ登校に抵抗がある場合もある。
- 2 保健室までは、保護者が連れて来ないと自力では登校できない状態がある。しかし、一旦来室すると下校時までいることができることもある。
- 3 学校行事や楽しい学習活動が動機となって登校できても、翌日からしばらく登校できない状態が続く場合がある。



- 4 欠席している児童生徒に登校を促したいと思っても、本人が負担に感じるのではないかと思われるために、家庭訪問や家庭との連携が滞ってしまうことがある。



考えられる対応例

- 1 保護者は、できるだけ早く登校してほしいと願っている。その心情を理解しながら、児童生徒の現状を家庭と学校が十分に共通理解し、登校についての判断は本人の状況をみながら対応したい。
- 2 不登校の児童生徒が、学校に行くためには、かなりの勇気とエネルギーを必要とする。そのため、学年が低い場合などは特に保護者が学校まで連れてくることも大事になる。学校生活への慣れの状況もみながら、徐々に自力登校を促したい。
- 3 不登校状態が長期間になっていた児童生徒は、登校したいという思いとは裏腹に、登校したときの同級生の視線や教師の言葉、学習内容などに強いストレスを感じることもある。登校によるストレスから欠席が続くことを前提に、登校時の状況を見守り、本人の学校における生活の仕方を十分相談し、対応することが大切である。

- 4 いわゆる「登校刺激」のとらえ方である。登校刺激は、学校側の立場における判断よりも、不登校になっている本人の立場で考えることが大事である。担任からの電話や家庭訪問、学校の資料、友達の誘いなど、何にどのように反応するのかを、保護者と情報交換しながら適切に判断することが必要となる。  
また、精一杯の努力をして保健室等へ登校し、明るく振る舞っていた生徒を廊下から見た教科担任が、「そんなに元気なら、教室で授業を受けなさい。」等と言ったことで、その後登校できなくなった生徒もいるので、不用意な言動には留意したい。